

令和3年度 第1回松本市博物館協議会 議事録

- 1 日時 令和3年4月26日(月) 午後1時30分～4時
- 2 会場 松本市立博物館講堂
- 3 出席者
 - (1) 委員 笹本会長 小林副会長 大槻委員 川船委員 村井委員 百瀬委員
山根委員 山本委員 米山委員
 - (2) 博物館 木下館長 中原課長 百瀬課長補佐 三木課長補佐 小原係長 堀井主任
一ノ瀬主任(記録) 竹内主査 保坂会計年度職員(以上会場係)
 - (3) 傍聴者 報道関係1社

4 会議の概要

- (1) 開会
- (2) 委員委嘱

学校教育関係者として選出されている徳武由和委員に代わり大槻久委員を選任。

【自己紹介】

開明小学校2年目の大槻久です。退職まで2年間あるので、博物館を利用させていただいた恩返しと皆さんとのつながりを広め深めて私自身の見識を広めたいと思って校長会の中で立候補しました。よろしくお願いいたします。

- (3) 会長あいさつ

博物館がより良くなるために、実行できることに関して考えていきたい。

同時に市民のために博物館はどうあるべきか。

地域の文化を向上させていくためには我々に何ができるか。

本年度、同時に今日の会議もよろしくお願いいたします。

- (4) 館長あいさつ

全委員の参加、コロナ禍なので短時間で実りのある会議に

5 議事

- (1) 新・松本市立博物館の管理運営の検討について

前回の書面会議の振り返り

笹本会長 前回ずいぶん論議していただいて、燻蒸のために休館日が必要と集約されている。博物館協議会としては、働く側の人たちの問題を重視したい。きちんとした研究をしてもらうためには、休みをきちんととれる体制を作っていくべきである。これまで開館日が非常に多かったために、ローテーションとかいろんな形で無理をしないと休みが取れないという状況だった。今後の研究展開のためにも、学芸員、職員の休みがきちんととれるようにという方向性を付け加えておけたらありがたい。以上、私の意見も含めて、最初の部分、前回の議事等に確認したものとしたい。

新・松本市立博物館の特別展等の開催方針について

笹本会長 今日もっとも大事な部分です。(1)では「ふかめる」、「はぐくむ」、「つなげる」という目的、(2)では、博物館の収集保管、調査研究、展示・教育支援という従来の機能に加え、「交流・情報交換」「集客・観光」といったニーズを意識して、事業を展開する。トップは決して観光ではない。

山本委員 顧客は(1)はおおむね市民を想定していると、(2)が観光の部分、旅行者、観光客を対象としているというイメージ。

⇒ (1)にも観光の目的を入れているつもりで、その部分が「つなげる」という部分。松本の特徴を見出して、観光客の皆さんに理解をいただく。この部分が、市民の皆さんから観光への橋渡し「つなげる」という部分で、観光に貢献をするという提案。(木下)

山本委員 松本市立博物館が提案する特別展の実施というのも入ると思うがいかかがか。

⇒ 自分たちで企画したものを、全国に発信していくというパターンもありうる。

笹本会長 企画展は、松本市立博物館の学芸員が地域の特徴や収蔵資料に関することをテーマにしなが、調査研究の成果をもとに企画する展示会。それを補完するものとして、特別展が出てくるはず。

山根委員 昔は観光客のためにどうしたらいいかということをやったが失敗した。まず、地域の人たちに楽しんでいただいて、外からくる人たちもそれを楽しんでいただくという観光街づくりに変わってきた。特別展については、大きなイベントはほとんど夏の時期だが、オフシーズンの対策というのがもともとのイベント。経済効果を望むのならオフシーズンにやっていただくのが一つだと思う。企画展を地域向けにどうするかというのが先にある、その間に、例えばオフシーズンでもいいから、特別展を持ってくるというのが理想かなと思う。

大槻委員 博物館に対する関心が薄くなっていたり、敷居が高くなっていたりするところがある。特別展が、博物館を身近に感じて、ここへ足を踏み入れていない人が来て、見てよかったなという印象に残る機会というのは大事なことだと思う。何度も来て気づくようになるので、そんな子どもが増えればと思う。

村井委員： (企画展の準備、特別展の準備、その他の準備等学芸員さんの負担がすごく大変だということは重々承知のうえで) この3回の特別展・企画展以外の時、「この特別展示室どうするんですか」というのが、市民の皆さんから質問が出ると思う。2階の展示室がクローズしている期間が長ければ長いほど、市民に対する説明がつかない。

笹本会長 すべて市民を中心に考えていくべきだと思うので、事業の区分の方も、企画展示が(1)、特別展が(2)とした方がいい。博物館は何のためにあるのかということ的前提にして順序を変えていただければと思う。

⇒ 配慮が足りなかった。一番大事なことは何なのかという意識が欠けていた。

川船委員 組織としての問題点がある。学芸員の異動が多い。学芸員をどうやって育てるかということにもっと力を入れていただきたい。専門家を作っていただきたい。資料の保

存とか見ていると非常に問題があると思う。学芸員だけではなくて、一般の市民の皆さんの力を借りる、技術者の力を借りるといこともできるような提案をこの機会にしてほしい。

小林副会長　松本は学都のなかの学びの部分強調していかなければいけない都市であり、そういう素材もたくさんある。学芸員の人数が、あるいはどの程度の能力のある学芸員がいるかというのが、やっぱり博物館の命ではないか。松本の観光というのは偏っていて、冬場にドカーンと減っちゃう。できれば、観光的なメリットといえば冬来た観光客に落ちていて時間を過ごせるような施設があってほしいなというのは一つの希望。これからは、学びは深くなっていく時代。単なる「みてきたよ」じゃなくて、そこで何かを感じてもらわないといけない。今までのように松本城のチケットの付属品で終わってしまっではいけない。ホテルや旅館なんかでも、「博物館おもしろいから」と言えるほどになっていただきたい。

米山委員　ターゲットとして松本の市民が一番だということはわかっていて、本当にそうだと思うんですけども、実際問題、自分の周りを見渡しても、市民の人って興味のある人、松本の歴史文化に興味のある人は少ない。どんな企画をしても、結局市民を対象にしているだけだと、赤字になってしまうという現実があると思うので、その辺をちゃんと踏まえて開催時期とかを考えなくては。企画展の魅力とかだけで集客はできないと思うので、企画展にいかにして人を呼ぶか、市民を呼ぶか、興味を持ってもらうかということを開館までの間にもっと研究していかなければならない。

貸室の在り方について

笹本会長　貸室の必要性については全員一致で認めてしまっているのではないかと。積極的に市民の皆さんが博物館を利用しながら論議をしたり、場合によっては、場を通じていろいろ考えたりするようなことをやっていけばいいと思う。「なんでもいいというわけではない」というところだけは強調しておきたい。

大槻委員　人の流れが博物館に向いているということ、周りの人が見るといことはとても大事なことだと思う。「なんでもあり」はどこかで線を引いた方がいいかと思う。学芸員や職員が、そのことの対応に気を取られて、時間を割いたりだとか、不便になったりだとかすると、とてつもない無駄であると思う。私たちの、例えば社会科の仲間で、会議そのものは博物館に関係ない内容ですけれども、会議が終わって、残りの後半、あるいは全部のところ博物館を見させていただくとか、そういったきっかけにもなると思うので、目的を確かめながら、また、運営の方で支障がないようなところで枠とかは作ってもらえればと思う。

管理運営手法について

百瀬委員　指定管理の問題では、ホール・キッセイ文化ホールが名古屋の業者が指定管理

者を取って2年で撤退した。そんなことがないようにしなければならない。

川船委員　新たな切り口でお客さんを連れてくるということがあると思うので、常に新しいものを入れていけるような組織を作るといのは大事だと思うが、実際に博物館の事業に市としてどのくらいのお金を使っているのか、学芸員や職員がどれだけいるのかわからない。もう少し情報を提供してもらえれば判断ができると思う。